

瀬戸内海東部域における回遊性魚類（サワラ）

の資源生態調査（抄録）

石田陽司・渡辺健一

本州四国連絡架橋の漁業影響調査の基礎資料を得るため、徳島県沿岸におけるサワラの漁業実態および資源生態を明らかにすることを目的として、播磨灘海域と紀伊水道海域に標本漁協を設定し、漁獲状況・操業実態・体長組成・生物測定の本調査を行った。その調査結果の概略を記す。なお詳細については本州四国連絡架橋漁業影響調査報告書第 63 号を参照されたい。

播磨灘海域は春期に流し網によりサワラを漁獲し、紀伊水道海域は秋期を中心に立縄および釣りで漁獲する。平成 5 年の標本漁協における漁獲量は、播磨灘海域の北灘漁協栗田支所で約 11 トン、紀伊水道海域の橘町漁協で約 1 トンとなり、不漁年とされた平成 4 年の 2～3 割にとどまった。その急減は単位努力あたり漁獲量にも表れた。さらに標本船日誌調査資料においてもその様子が認められ、海区別単位努力あたり漁獲量はきわめて低水準となった。

播磨灘海域に春漁においては、平成 4 年級群である満 1 歳魚の割合が少なかった。その結果は平成 4 年紀伊水道海域秋漁において当歳魚の割合が少なかった事実と一致する。紀伊水道海域秋漁においては、1 歳魚（平成 4 年級群）、当歳魚（平成 5 年級群）ともに非常に少なかった。このような極端に年級群が小さな状況は、平成 3 年以降続いている。

生物（精密）測定調査により産卵期を推定した。その結果平成 5 年の産卵盛期は 6 月以降にあったと考えられた。